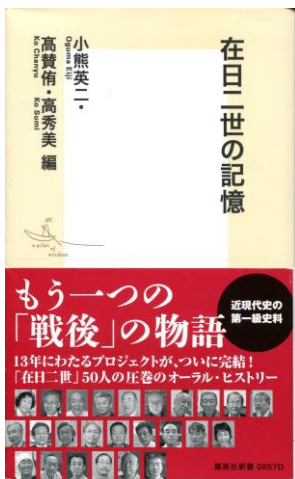


<本の紹介> 『在日二世の記憶』 飛田雄一 (『むくげ通信』279号、2016.11.27)



小熊英二・高賛侑・高秀美編『在日二世の記憶』
(集英社新書、2016年11月、1600円+税)

本書は、2014年4月から2016年10月まで集英社新書HPに掲載されていたものを単行本化したものだ。『在日一世の記憶』(小熊英二・姜尚中編、2008年10月、集英社)の続編でもある。

新書版とはいえ761頁の大部なものだ。私は最近、本を読むときは井上ひさしの真似をして、紐をつけている。井上ひさしは紐を6本ほどつけて読むらしい。タコ糸を糊でつけるという。私は、タコ糸ではなくて押さえると厚みが薄くなる刺繍糸をセロテープで止める。本当に具合がいい。注、地図、登場人物一覧などに1本挟んでおくのだ。お陰で読書量も増えた。そして、この本も読んだ。

<目次>は以下のとおりである。

本書の刊行に寄せて 姜尚中 / 1 共生のこの地に「コリア文化博物館」の実現を(申英愛 女) / 2 宝塚で外国人市民の共生目指して(金禮坤 男) / 3 担任の机に入ったままだった「就職希望書」(鄭琪煥 男) / 4 元アートネイチャー会長にして俳人の身世打鈴(姜琪東 男) / 5 天才打者の壮絶な被曝体験(張本勲 男) / 6 親父はどうして、あんな生き方しかできなかったのか(都相太 男) / 7 関東大震災の直前、日本にやって来たアボジ(鄭宗碩 男) / 8 囲碁で結ばれた同胞との絆(洪希徳 男) / 9 「東九条マダン」は、僕らの目指す社会像やねんね(朴実 男) / 10 川崎・桜本に生きる(裴重度 男) / 11 全盲を超え研究と障害者差別是正に尽力(愼英弘 男) / 12 バイオマテリアルの研究と応用への道(玄丞然 男) / 13 夢は哲学の立て直し(竹田青嗣 男) / 14 福島で同胞と共に生き、三・一一後に抱く思い(陸双卓 男) / 15 ニンニクの臭いが漂う街に生まれて(姜春根 男) / 16 一世の暮らしを盛岡冷麺に込めて(邊龍雄 男) / 17 同胞医療と共生社会創造のために(辺秀俊 男) / 18 在日スパイ捏造事件を通じ民族運動の一翼を担う(李哲 男) / 19 痛みを分かち合いたいから差別される側

に(鄭香均 女) / 20 朝鮮人の父と日本人の母に生れたからこそ朝鮮にこだわる(金治明 男) / 21 美しい音楽を奏でるだけでは存在の意味がない(丁讃宇 男) / 22 朝鮮人の尊厳回復し、過去を繰り返させないために(洪祥進 男) / 23 朝鮮人であることを隠し続けたアボジ(申孝信 男) / 24 「和諍」の精神で仏の道に励む(崔無碍 男) / 25 この社会はいまだに国、国家というものにとらわれ過ぎている(金成日 男) / 26 日立闘争後の「続日立闘争」(朴鐘碩 男) / 27 「行く道がどんなに険しくともわれらは明るく進む」(李英銖 男) / 28 人情ホルモン「梅田屋」(南栄淑 女) / 29 三〇代で医者を目指す(金武英 男) / 30 次世代に在日同胞のバトンを託して(金信鏞 男) / 31 師匠はいない、アウトローが居心地いい(李末竜 男) / 32 父と母の思いを受け継ぐ(蔡鴻哲 男) / 33 身体障がい者の劇団を創設(金満里 女) / 34 民族・女性・「慰安婦」痛みの歴史を未来の希望に(方清子 女) / 35 生まれ変わっても、指揮者に(金洪才 男) / 36 舞台の幕が上がって三分間が勝負(金守珍 男) / 37 俺の歌はすべて愛(朴保 男) / 38 オモ二、ハルモ二に寄り添って生きる(鄭貴美 女) / 39 在日済州島出身者にも深い傷跡残した四・三事件の完全解決を(呉光現 男) / 40 日本と韓国で活躍する劇作家・演出家(鄭義信 男) / 41 被爆者二世として何かせにゃいけん(韓政美 男) / 42 ありのままのわたしの歌を歌う(李政美 女) / 43 マジシャンとして夢を追い続けて(安聖友 男) / 44 あくまで自分のため、自分自身の解放のために表現する(金稔万 男) / 45 人生はここからが第二章(李鳳宇 男) / 46 父が始めたパチンコ店を二兆円企業へ(韓裕 男) / 47 テコンドーのパイオニアにして経済学博士(河明生 男) / 48 家族のドキュメンタリーを撮りたい(梁英姫 女) / 49 商売に国境はない、人生にも国境はない(俞哲完 男) / 50 ハイト・スピーチを許さぬ裁判闘争の勝利(金尚均 男) / 巻末鼎談 もう一つの戦後日本史『在日二世の記憶』を編集して/小熊英二・高賛侑・高秀美 / 用語解説 高賛侑

50名は生年月日順に並んでいる。最初の申英愛は1932年2月、最後の金尚均は1967年7月生まれだ。本書には「社会運動に、ビジネスに、自営業に、教育に、映画に、演劇に、芸能に、スポーツに自分たちの存在感を示しえた人たち」(姜尚中)のインタビューが収録されている。

直接知っている金禮坤、朴実、裴重度、愼英弘、姜春根、李哲、鄭香均、洪祥進、金成日、朴鐘碩、金信鏞、金満里、方清子、朴保、呉光現、李政美、金稔万、河明生、金尚均をまず読んだ。「社会運動」関係者をよく知っていることになる。洪祥進、金成日は結婚式にも参列している。が、知っているつもりでも知らないことが多い。キーワードは貧困ではと思うぐらい、彼/彼女らがつらい幼少期を過ごしている。1950年生まれの私と同じ世代の人も多い

が、きょうだいも結構多いという印象ももった。この人々はよく知っているという方もいるかもしれないが、そのような方にこそ絶対必読の書である。

ここでは、私のよく知るこれら 19 名以外の方について述べてみたい。

現在以上に就職差別が厳しかった時代で、それぞれに苦労されている。一般企業への就職が難しかった時代で、私の在日の友人にも自営業の方が多いが、本書の人々にも多い。



「バイオマテリアルの研究と応用への道」の**玄丞 然**（1947 年 5 月生）は、私にとって特に新鮮だった。朝鮮大学卒業後京大で博士号を取得し、高分子研究一筋で研究所、京大准教授等を歴任し、2012 年の京大退職後も「研究とビジネスで生涯現役と目指して」頑張っておられる。抜糸しないでいい手術用の糸も彼らのチームが作り出したのだ。会社を発展させて奨学金財団の設立も考えられているという。

「朝鮮人であることを隠し続けたアボジ」の**申孝 信**（1950 年 11 月）は私とまったくの同世代。父は済州島出身の朝鮮人、母は日本人だが、父が朝鮮人であることを知らずに育ったという。学生運動、入管法反対運動にも「日本人」として参加した。東北学院大学のキリスト教青年会（SCA）にも参加していた。1972 年に運動関連で逮捕されたとき刑事が「おめえの親父さんは朝鮮人だよなあ」と言われたときも完全黙秘の彼に何かしゃべらそうとしてそんなことを言ったと思った。大学は退学させられた。その後、いろんな葛藤をへて韓国青年同盟の活動に入っていく。いま、東日本大震災の被災者支援の活動を積極的に行っている。震災前は福島県を舞台にした時代小説で農民を書きたいと導入部はすでに書いたという。「震災で飛んじゃった」というが是非書きあげてもらいたいと思う。

「「和浄」の精神で仏の道に励む」**崔無碍**（1951 年 4 月生）は、朝鮮大学を卒業した統国寺（大阪）の第 4 代住職だ。統国寺は聖徳太子が創建し百済からの渡来僧・観勒が開山住職として招かれたという。統国寺は百済念仏寺と呼ばれていたが、渡来系の寺が朝鮮植民地支配の時代にそのことが隠されたことを崔さんは歴史を調べる中で解明した。寺に安置されている朝鮮人の遺骨にもドラマがある。1937 年に新興仏教青年同盟に加盟して治安維持法違反で逮捕され服役した岡山吉備津真城寺の大隅実山住職が、服役中拷問を受ける朝鮮人の姿をみたことなどから朝鮮人犠牲者の遺骨を引き取り、毎年慰霊法要を行っていた。1974 年病気のため大隅住職が法要を続けられなくなり、統国寺が遺骨 78 柱を預かったというのだ。いろんな「ドラマ」がそこにはあるのだと思った。

「人情ホルモン「梅田屋」」の**南栄淑**（1952 年 6 月生）の、「喧嘩は負けるが勝ち」を信条にする南さんのオモニもとても素晴らしい。「日本人も朝鮮

人も、良い人もいれば悪い人もいる」といい、店に来る名古屋工業大学の苦学生に客の飲み残した瓶ビール飲ませてあげたという。数年前にその学生が店を訪ねてきて、オモニの心遣いがありがたかったと南栄淑に伝えたという。その伝統は受け継がれ、今は南が名古屋グランパスにキムチとチャンジャを差し入れて選手に喜ばれたり、本田圭佑の誕生会を梅田屋で開いたこともあるという。ここにもドラマがある。

「師匠はいない、アウトローが居心地いい」というガラス工芸家の**李末竜**（1953 年 3 月生）もすてきだ。父が岐阜県で飯場を開いていて、木曽川の丸山ダムの工事が 1954 年に終わってから、犬山にブタ小屋付きの 1 軒屋を買ったという。李さんは 17 歳までそこで暮らした。韓青同の活動で申京煥強制送還裁判にもかかわったというから私もどこかで会っているかもしれない。「ガラス工芸の街・瀬戸」のために積極的に地域の活動に参加している。

「舞台の幕が上がって三分間が勝負」という**金守 珍**（1954 年 11 月生）、「日本と韓国で活躍する劇作家・演出家」**鄭義信**（1957 年 7 月生）。演劇人は、インタビューも面白い。金守珍は「芝生が植えられた広いところで遊んでいた記憶があります。そこは府中競馬場だったんです」、鄭義信は「僕の生まれた場所は世界遺産なんです」とくる。それは姫路城だが城主ではないので門の中で育ったのではなくて、内堀の石垣の一角のバラックに育ったというのである。

「人生はここからが第二章」という**李鳳宇**（1960 年 7 月生）は、フランスへは朝鮮大学でフランス語を勉強していたので行ったという。テレビ番組で、大統領候補の討論会があつて、「フランス人とは？」という質問に、シラクは西洋文明を切り開く博愛主義者であるなどなどと語ったのに対し、ミッテランが「私が考えるフランス人はフランス語をしゃべりフランスに税金を納めている人たちです、以上」といったという。李鳳宇は「過去ではないんですね。今なんだ、これだと思いました」と納得する。パリでは 1984～85 年に「日本映画大回顧展」があり黒澤明、今村昌平らの 50 作品を観たが、溝口健二が一番すごいと思ったそう。良い映画をこつこつ作っていきたい」という李鳳宇さんの次の作品を期待している。

本名で甲子園に出場してダンボールいっぱいの手紙を同胞からもらったという元京都商業の**韓裕**（1963 年 4 月生）は、パチンコ業界を改革しマルハンを 2 兆円企業に成長させた。「ディヤーピョンヤン」の**梁英姫**（1964 年 11 月生）はエンターテインメント性の高い作品」を撮ると言っている。



さて、もうこの本を読むしかないと思ったあなた、読んでください。後悔はしません。